「シンセサイザーの教育実践への活用」

領域名：老年保健看護

報告者：砂川　ゆかり

教育及び実践の課題

人生 100 年時代において、長い就労期間が求められている今日、高齢者の就労をサクセスフルエイジングや介護予防に取り入れていく必要性がある。そのため、本学の老年保健看護の教育課程では、老年保健看護Ⅰ、老年保健看護実習Ⅰ、老年保健看護Ⅱで高齢者の就労を取り上げている。

我が国における介護予防への取り組みは、そのほとんどが厚生労働省の示す専門職主導によるサービス提供であり、その参加状況は目標値を大きく下回っている。参加者は女性高齢者が多く、男性高齢者の参加は、介護予防事業全体の 2 割未満であり、男性高齢者の介護予防の取り組みは、地域を越えた全国的な課題となっている。そのため、老年保健看護の教育課程においては、男性高齢者の就労とサクセスフルエイジングや介護予防との関係において、性差を強化する必要性があると考えた。

活用した論文の概要

本論文の研究目的は、日本の都市と農村の高齢者において、就労をしているかどうかが健康維持の予測変数となるかどうかを明らかにすることであった。その結果、男性では、地域に関わらず就労群が、非就労群に比べ、基本的日常生活動作（BADL）障害発生の調整ハザード比が有意に高かったが、女性では有意ではなかった。就労は、男性にとっては基本的日常生活動作（BADL）低下を抑制するかもしれないが、女性では有意ではない。従来の日本社会における性役割の相違については、特に男性が社会活動に参加するための有効な解決策となるだろう。

教育及び実践への活用

高齢者の就労については、老年保健看護I（2 年次前期）では、サクセスフルエイジングを生きる高齢者として働きつづけるモデル高齢者の事例を示し、老年保健看護実習I（2 年次前期）では、サクセスフルエイジングを生きる高齢者に関わり、就労も含めた生活史の語りから対象理解のための実践を学んでいる。老年保健看護II（3 年次前期）では、健康レベルに応じたケアのひとつとして就労が介護予防につながることを示している。シンセサイザーでの検討を受けて、老年保健看護IIでは、高齢者の就労に関する性差を示す研究成果の紹介を加えた。さらに、就労を活用した介護予防の実践を具体的に伝えられるよう、高齢者の就労を支援している実践者の語りから学びつつ、就労の様子を動画媒体を使って学生にわかりやすく提示している。

参考文献

Yoshinori Fujiwara, Shouji Shinkai,et al. (2016). Engagement in paid work as a protective predictor of basic activities of daily living disability in Japanese urban and rural community-dwelling elderly residents: An 8-year prospective study. Geriatrics Gerontology, 16, 126-134.